

会 議 要 録

会議の名称	酒田市文化芸術推進審議会(第4回)
開催日時	平成31年2月17日(日) 午後3時 ~ 午後5時
場 所	酒田市総合文化センター412号室
出席者	<p>○出席委員</p> <p>中川 幾郎 委員、熊倉 純子 委員、市原 多朗 委員、工藤 幸治 委員、 田中 章夫 委員、阿部 直善 委員、加藤 聡 委員、加藤 真知子 委員、 白旗 定幸 委員</p> <p>○オブザーバー</p> <p>村上教育長</p> <p>○事務局</p> <p>菅原教育部長 (社会教育文化課)</p> <p>阿部課長、市村課長補佐、小松主査兼係長、杉山主査、土門主査、中里調整主任、 菊池主事</p>

1. 開会(事務局)

2. 審議会長挨拶

こんにちは。前回は9月に開催し、答申を出した。今日は報告をいただけるものと思っている。合わせて次年度以降の大まかな方向性も示してくれるようなので、皆様のご意見を賜りたいと思う。本日はよろしく願いします。

3. 協議

中川会長

それでは第4回酒田市文化芸術推進審議会を開会する。本日の欠席は上松委員。白旗委員は後程お越しになる予定。従いまして酒田市文化芸術推進審議会規則第三条第二項の規定により会議は有効に成立していることを報告する。それでは協議の1、答申の対応についてまず事務局から説明をお願いする。

事務局

事務局(課長):答申に対する対応について説明させていただく。

資料は1~6まで。平成30年9月28日に皆様から教育委員会に対して三つ答申をいただいた。一つ目は、希望ホールの方針を「社会包摂と育成」とし、計画的な事業実施に努めることという答申。それに応え、私共では資料2の希望ホールの運営方針を作成した。資料2の1ページから2ページまで条例と推進計画に基づき、コンセプトと方針を書かせていただいた。説明は省略する。資料2の3ページ、事業をご覧いただきたい。社会包摂と育成ということで希望ホールの運営方針を定め、事業としてどこが新しく変わったのかを説明させていただく。(1)事業の基本的な考え方として、年齢や性別、社会的な状況に関わらず、あらゆる市民に社会参加の機会を開く社会包摂の理念に基づき、子ども、若者、障がい者、高齢者、在留外国人等の文化芸術活動の充実に努めるほか次代を担う子どもたちを対象にした文化芸術事業の

一層の充実に努め、次の事業を実施する。事業は大きく4つ。①文化芸術の鑑賞機会の提供、②創造・発表事業の実施、③普及・育成を目的とする事業の実施、④貸館事業です。具体的な事業内容は、①の鑑賞事業については、これまでホールに足を運ぶことの少なかった市民の方々にも鑑賞しやすい環境を整備し、より多くの市民が気軽に文化芸術に触れる事ができるように鑑賞機会の充実をはかっていきたい。事業例は、平成31年度においては障がい者ミュージカル、「屋根の上のバイオリン弾き」を開催。同時に障がい者アート展も今年に引き続き開催する。市原多朗さんのマスターコースも継続して開催する。将来展望としては、就学支援を受けている児童・生徒への鑑賞機会の提供、障がい者への鑑賞機会の提供、不登校等の事情を抱える子どもたちへの鑑賞機会の充実を考えたいと思っている。②創造・発表事業については、酒田の地域資源を活かし、酒田らしい創造事業の実施、発信を目指していきたいと考えている。平成31年度の事業については、コンテンポラリーダンス事業を行い、S-JINKへの参加を考えている。4ページをご覧いただきたい。過去には土門拳の写真を活かしたダンス作品を市民参加型事業として制作・発表した。コンテンポラリーダンス、その時は鈴木ユキオさんから「土門さんとワタシ」を土門拳記念館の中庭で踊っていただき、最後には希望ホールで市民参加型の事業を発表していただいた。将来展望は酒田市出身の詩人吉野弘さんの詩の世界を作品としてコンテンポラリーダンスで創作発表できたらとも考えている。③普及・育成事業は、全ての市民が等しく文化芸術を創造・享受する権利を持っているという基本理念に基づき、身近に文化芸術を親しむことができるような機会の提供に努めていく。平成31年度の新規事業は、アートスタート事業を考えており、指揮者の工藤俊幸さんによる合唱指導、山形交響楽団による楽器クリニック、市内の芸術団体等によるランチタイムコンサートを希望ホールのホワイエ等で実施する予定。多様なジャンルでの育成事業の実施を考えている。④貸館事業では、市民の自主的な文化活動の発表・創造の場として希望ホール等の会場を提供する。後程説明するが、利用にあたっては専門的な技術スタッフが、事業の制作、演出や技術面での助言を行うなど、文化芸術活動の支援を行う。⑤市民参加、公共ホールの活動や運営への市民参加など協働には様々な形があるが、希望ホールとしては「鑑賞者として参加」「参加体験型事業への参加」「事業実施時のスタッフとしての参加」を通し、希望ホールが市民にとって宝となり、誇れる施設となるよう、市民と一緒に努めていく。⑥管理運営、効率的運用、利便性向上、事業評価といったPDCAサイクル手法の導入、効率的な事業評価を継続的に実施する。以上が希望ホールの運営方針である。

続いて答申の2、条例に基づいた計画の実現に向け、文化芸術の施策を推進する行政及び財団等の推進体制の見直し、体制強化に努めること、それから答申の3のこれからの連携の在り方を見直し、市民、企業、文化団体等と市が協働の原則に基づいて行動し、良好な協働関係を構築するように努めること、この2と3について資料を元に説明する。資料3は、文化行政の施策を推進するための体制に関する図である。基本的には酒田市文化芸術推進計画の最後の方に記載してある推進体制の図をベースにしているが、更に詳細に今回作成した。推進計画で示している基本的施策を複合的に実施し、課題解決にむけて事業を実施するという方針が変わる。そのため文化行政施策を協力的に推進していく組織が必要になってくる。新たに市民が参加する組織として、“推進プロジェクト会議(仮称)”を立ち上げて、希望ホールの事業だけでなく酒田市の文化行政、施策全般の推進について共同で事業を実施する組織を立ち上げていきたいと考えている。この推進プロジェクト会議の中には推進事業を最終決定する企画運営部会、事業の検討・調整・実施を担う作業部会、希望ホールで実施される事業の実施の補助を主に目的とするサポートグループで構成されます。作業部会については、文化施設の学芸員など専門性を有する職員、まちづくりに積極的に携わっている市民、文化芸術に興味のある若者などの市民で構成する。希望ホールサポートグループは公募の市民で構成する有償ボランティアグループにしたいと考えている。作業部会でも

市民協働をはかっていきたいと考えており、青枠で囲まれている部分の文化のまちづくり市民会議の中で、幅広く市民の皆様から意見をいただく機会をつくり、課題に対してどのような事業を実施していけばいいか意見を聞いていく予定である。この会議は、酒田市の総合計画を策定する際に開催した未来会議のように、学生からも参加してもらうなど、ワイワイガヤガヤと語る会議にしたいと考えている。文化団体の関係者の皆様からも是非この会議に参加していただき、市民みんなで酒田市の文化について考える場所にしたいと考えている。資料3の次のページをご覧ください。2ページ目、企業立案・実施イメージについては推進プロジェクト会議の作業部会において文化のまちづくり市民会議の意見も踏まえ課題解決に向け実施する事業を企画、立案していく。この左側の水色の部分が推進プロジェクト会議となる。そこでは、より効果のある事業の推進をはかるために協働パートナーを依頼する。例えば中学校の合唱レベルを上げると同時に合唱の楽しさを感じてもらいたいという目的の事業を考えたいという時には、市内外の音楽関係者や音楽の先生から協働パートナーについていただき、一緒に事業を組み立てて実施していきたいと考えている。また土門拳記念館を有する酒田の高校生の写真撮影のレベルを上げる目的の事業では写真家の先生や酒田市写真連盟の方々、高等学校の写真部の顧問の先生方から協働パートナーについていただき一緒に事業を組み立てて実施していく取組みをしていく。事業実施の際には下に書いてあるが、社会教育文化課、作業部会、協働パートナー、サポートグループが一体となって事業を実施するというようなイメージになる。続きまして資料3の3ページをご覧ください。上段は年間の大まかな事業推進スケジュールである。行政、文化芸術推進審議会、推進プロジェクト会議、庁内調整会議、市民会議の予定を入れ、スケジュール感をつかめるように記載した。その下が、年間事業推進イメージである。4月に審議会を開催し、前年度の事業について審議し、評価をいただいて社会教育文化課に返ってくる形になる。5月～8月は前年度の評価を受けて、次年度事業の検討を行うため、推進プロジェクト会議と市民会議を開催し、前年度事業をブラッシュアップする。9月には2回目の審議会を開催して次年度事業を確認し、必要に応じて市役所の庁内調整会議を開き他課との連携をはかっていきたい。10月には行政で次年度予算要求、助成金の申請、翌1月には予算内示と進み、2月に3回目の審議会を開催して次年度事業の報告、当該年度の事業を報告する。3月に予算確定、次年度事業の準備という年間のイメージを作った。最後の希望ホールサポーター事業(仮称)について説明する。希望ホールが開館して以来、これまでは無償ボランティア組織の希望ホール自主事業企画運営委員会から、ホール事業のボランティア組織としてお力添えをいただき、高い評価をいただいてきた。平成31年度からは希望ホールの事業のみならず、文化芸術推進計画に基づいた事業全般にわたって協働する組織として、改めて有償ボランティアで構成する希望ホールサポートグループを立ち上げて募集していきたい。有償としたのは、誰もが無理なく安定した活動が続けられるようにということと、文化芸術団体や市民が主催する事業でも依頼があればそのノウハウを活かしてスタッフとして派遣したいと考えている。公募の対象については18才以上の方で、高校生以下は不可です。高校生については、南高等学校と協定を結んでいるということもあり、まずは南高校と一緒に事業をできたらという思いがある。別枠で高校生を募集する予定もある。サポートグループは人数制限なく市外にお住まいの方も可能としたいと考えている。年2回の研修を受けていただき、ホール事業だけでなく文化芸術推進事業の協働スタッフとして活動していただきたいと考えている。謝金は公演終了後に800円/時を口座払いする。以上、答申に対する2、3への対応ということで報告させていただいた。今の段階では構想ということで若干変更するかもしれないがご了承いただきたい。

中川会長

資料の4と5はこれから意見をいただいてから説明をお願いします。

委員

資料3のp. 3「ブラッシュアップ」という言葉がわからない。説明していただきたい。

事務局

ブラッシュアップとは、磨き上げるという意味。審議会から前年度の事業について評価をいただき、それを受けて前年度事業を継続する場合は磨き上げ、更に効果のある事業にしていくということ。

委員

前年度私がマスターコースをやらせていただいた時は、私が専門とするイタリアオペラに特化したもので実施したため、一般の方に受入れにくい部分もあったと思うが、今回は間口を広げている。少し皆さんにわかりやすく、聴いていて抵抗がない、ずっと受入れられるようなスタイルをみんなで目指そうということで、その辺に力を注ごうと思っている。去年よりは皆さんが受け取りやすいコンサートになるはず。社会包摂ということで、屋根の上のヴァイオリン弾きが実現することになり感謝している。新潟の役所の人と話す機会があったが、家族が癌になって一人で悩んでいる方が多いので、出向いて行ってコンサートをしたり、招待するというのも社会包摂で、自分は今それをやっている。一昨日そういう考え方もあるんだと勉強したところである。

委員

答申が具体的でわかりやすくなった。また、資料2の希望ホールの運営方針に「子ども、若者、高齢者、障がい者、在留外国人等全ての市民が」と、こういう言葉が的確に入っていてとても分かりやすい。認知されていくべき大事な事だと思う。資料3の推進プロジェクト会議の構成メンバーはどの程度の人数を想定しているのか。

事務局

企画運営部会については構成メンバーの通りだが、作業部会については10人いかない程度で考えている。サポートグループの人数は無制限。作業部会には酒田市美術館、土門拳記念館、本間美術館の学芸員からも参加してもらう予定で考えている。

委員

これから実際に答申に沿って事業を行うとなると、3の「良好な協働関係を構築するよう努めること」の言葉はその通りだが、実際どのような構築をし、どのセクションで行動に移していくのかをもう少し具体的に聞きたい。

委員

私も同じ様な印象をもっている。資料3の組織が実際にできて来年度からどんな風に機能していくのかまだイメージが作りづらい。市民という言葉が沢山出てくるが、11万人いる市民に対してここに参画していただく事についてどの程度しっかりしたアクションを起こし、組織を機能させられるのかが全てだと思う。

中川会長

もう少し詳しく市民像を出さなくてはいけないのではないかと。あとで回答をいただきたい。

委員

答申については異論ない。私自身としては、素直に受け止めている。資料2の運営方針の説明と事務局の説明を聞きながらワクワク感が生じてきた。とても嬉しく受け止めた。絵に描いた餅にならないように期待感を押しつぶさせないような実施段階が大事なと思う。これを実施していくにあたり、今の推進体制もじっくり充実させてしっかり機能するような細かい配慮も必要だと思う。ただ、まだ希望ホールや文化芸術の方向性が変わったことが全く浸透していない。方向性の変更に対して異論や反発もあるので、私はこれを実施していくと同時に、社会包摂と育成ということを丁寧に、広報や事業などあらゆるところで伝えていく事が大事

だと思う。2月のアートマルシェもこの流れをくむ一環かなと理解している。なぜ訳の分からない事をやるのかと言う方もいる。私たちは説明を聞いているから理解が深まるが、市民の9割はまだ浸透していない。どうやって市民に知らせるか、浸透させるかがこれからの答申の内容を含めて課題だと思う。方向性としては異論はない。

委員

最初に全体的な感想を申し上げる。この審議会が、策定審議会ではなく、推進審議会で、名前が象徴しているのかもしれないが、答申があった以降もその後のフォローもしている。そしてまた来年度以降も年に何回か開催される。従来の総合計画の審議会とは全く違うスタイルで私は大変評価をしている。しかも文化芸術分野にとどまらず、例えば今年の1月にあった協働の講演を聞いて、あのような学びの場を教育委員会の文化部門がリードしたことで、市の行政のあり方について市全体にも影響を与えたのではないかと。資料の作り方についても、中川先生たちの言葉をできるだけ一生懸命活用しようとしていることがよくわかる。このような形で計画を進めていってほしい。そういった意味でもこの審議会は大きな意味を果たしていると思う。次に質問だが、市民参画と市民参加、資料2のp5では市民参加という表現、資料3の1ページ目では市民参画とある。意識的に使い分けているのか。二つ目は、文化のまちづくり市民会議が総合計画の未来会議のようなイメージというのはよく分かるが、ファシリテーションはどのような人材を設定していくのか。あるいは育成をしていくのか。三つ目。作業部会では、まちづくりに携わっている住民を構成メンバーとするとあるが、具体的にどのような市民層を想定しているのか。四つ目。希望ホールサポートグループの中の(1)対象で、18才以上の心身共に健康な市民と書いている。「心身共に健康な」の言葉を入れた意味は何か。

中川会長

具体的な質問なので、答えていただきたい。

事務局

参画と参加の使いわけは、“参加の仕方”ということで“市民参加”と書かせていただいた。基本的には協働の形態として色々な参加の仕方があるという書き方になっている。作業部会、希望ホールサポート事業では市民との協働という形で組織したい。文化のまちづくり市民会議は“市民参画”で市民が事業に参画していくということを考えている。大きい意味では協働と参画は全て参加ととらえ、市民が参加する種類として協働、参画という意味合いで考えている。二つ目のファシリテーターは、まだイメージしていなかったが、作業部会の構成メンバーがファシリテーターの役割も担っていただくが一番いいのかなと思っており、メンバーを育てていくということも考えている。三つ目、まちづくりに携わっている市民、先ほど分かりづらいという話があったが、地域のまちづくりを一生懸命やっている若者に声を掛けていって、作業部会で新たな知識や意見、行政にない力をいただきたいと考えている。具体的には地域おこし協力隊で頑張っている方々に打診したいと思っている。四つ目、心身共に記載したのは、ホールのサポートは長時間立っていたりと大変だろうということで記載した。

中川会長

いかがか。あえて入れなくてもいいのではということか。

委員

はい。

事務局

公募した後にサポート事業に耐えられない人もでてくるのではないかと心配があり、あえて載せたが削除しても特に問題はない。

委員

もう少しいい方があると思うので検討していただきたい。

中川会長

今の事務局と委員が言った趣旨を合わせると、心身共に健康な方と記載しなくとも、ホールのサポート分野に支障の無い者で充分ではないか。障がい者を排除することになってしまう。

委員

私も社会包摂に矛盾していると感じた。

委員

4月に酒田市文化芸術推進計画の冊子を渡され、大変立派なものできたなと思った。市民参画の件で私ども酒田市芸術文化協会のメンバーが、誰がどのようにして計画を実施していくのかとかなり疑問を持ったようである。時間をかけ、できる限り行政側の意向を伝えてきた。この短期間で事業を構築したことにお礼を申し上げたい。これなら安心していけるという確信をもったところである。資料の最後にある今後の課題のところをしっかりとしないかとまた問題が生じてくるので頑張っていたきたい。それと関わって、文化のまちづくり市民会議でいろんな市民の課題や意見を入れて考えていくということを図式で表しているが、作業部会との関連はどうなのか。その中から作業部会にはいってもらおうという考え方が大きなポイントになると思う。有償ボランティアについては選考が大変。例えば障がいのある方もメンバーの一人だという気持ちに持っていないといけない。自信をもってやっていき、さらに毎年チェックして良いものを構築していく。

中川会長

文化のまちづくり市民会議の選抜方法など少し詳しく教えていただきたい。それから作業部会におけるまちづくりに携わっている市民とはどういった人が選抜されるのかよくわからないという指摘があった。その辺りを教えていただきたい。

事務局

文化のまちづくり市民会議の参加は自由。市民に公募したいと思っている。その時その時の課題について意見交換をする場にしたい。各々が具体的に考えていることも話し合う形にできればと思っている。未来会議で言えば、まちづくりのテーマの中でグループに分かれて話し合っていたが、そういったやり方でも面白いのかなと思っている。例えば、「音楽」というテーマでどんな事ができるか考える音楽チーム、「ダンス」ならダンスチームなど、分かれて意見を交換し合うという会議の仕方もあるのかなというふうに考えている。作業部会に関わる市民については先ほど申した通り、まちづくりを頑張っている若者たちに声をかけて一緒にやっていってけたらと考えている。文化のまちづくり市民会議で出た意見については社会教育文化課でとりまとめて、作業部会に落とし込んでいく形をとりたい。実際にファシリテーターを作業部会から出すことができれば、社会教育文化課というワンクッションを通さず作業部会に意見が落ちていくのかなと考えている。

中川会長

少しイメージが明確になったか。

委員

内容については非常に具体的でいいと思う。これから新しくどんな事業をしていくのか、社会包摂解と言ってしまうと、誰もがわかりやすく参加しやすいものにどうしても傾きがちになって、そういう部分が必要ないとは言わないが、もう少し尖ったものとか、美しいものや質の高いものをこっちから市民に提供してあげるといふ姿勢がなんとなく垣間見えて。それが不要だというわけではないが、今時の人は情報の読み取り能力が高いのでもう少し複雑な投げかけをしてもいいし、基本的には正解がなくいろんな答えの可能性があって、1人1人受け止めることや意見が違ふのであればということ認め合いながら、安易に多数決に傾きがちな現在の市民社会の問題に対して、ある種もう一つの考え方が出来る様な人を育てていく事が文化芸術

の大きな役割だと思う。分かりにくくてもその中から参加者が何を感じていくのかを大事にしていくような側面も入れていかないと、ただみんなが仲良く楽しいだけの事をやっても別の意味で税金の無駄になってしまうので、丁寧に中身を作ることが大事という注文が一つ。次に運営体制だが、「心身共に健康な・・・」はおっしゃる通りで、サポートグループが色んな人の広場になるといいなという気がしているので、時間給を払うことに今でも少し違和感がある。責任をもたせるという意味だと思うが、用もないのにホールに来て色々話ができるサードプレイス形式にするか、単に作品を享受しに行く消費者としてではなく、それが自分の居場所として何ができるかと、世代間交流が行われたり、色んな人の意見が感じられるということが大事。すぐには無理なので徐々に育っていかれば。サポートグループの自主性をどう風で育てていく考えていかなければならない。希望ホールがサードプレイスとして機能していくようになってくると、当然そこには様々な問題を抱えた人たちが居場所を求めてやってくる。難しい問題である。みんなを引き受けきれないこともある。管理していくかという発想ではなく、行政としてどうやって受け止め、サポートグループの人たちも自分たちで受け止め方を考えられるような、将来的にそういう場にならないと意味がない気がする。ここにいくら払うかだと思ふ。作業部会のまちづくりに携わっている市民はボランティアなのか、それとも有償なのか。まちづくり市民会議は先ほどの方法で面白いと思ふ。一方的に意見を言ってもらおうと、結果は残念ながら大体決まってしまう、欲しい物を買ってこいという意見がどうしても多数になってしまう。もっと大事な問題を考える機会にしてもらうために、ファシリテーターとして作業部会の人が入り、望んでいるものや意見の言い方がどう変化していくかを是非受け止めてほしい。作業部会が機能するかどうかがこの計画の成功のカギになってくると思ふ。資料3の2ページ目の協働パートナーが不安。まさに作業部会の方たちがパートナーをコーディネートしていかないといけない。協働は要は汗をかいてくださいと。新しい事業をやって税金を使うということは、楽しいことをやっていく反面、火中の栗を拾うということなので、そのことを含めて面白がってくれる市民参加をつかっていくのは本当に難しい。いつも糠床のようにかき混ぜていないとすぐ腐ってしまう。正解はないし、すごくいい状態と言うのは糠漬けのように一瞬。今日はベストだったという時は短いので常に次どうするか考えないといけない。

中川会長

熊倉委員からご指摘あったこととオーバーラップするが、文化のまちづくり市民会議はセレクションもせず、ミッションもきちんと示しもせずただ集まって下さいと言うのはよくないと思ふ。私の経験から言うと、とにかく何でもいいからみなさん集まって下さいとってうまくいったためしはない。当然、答申を読んでいること。こちら側が作った計画、条例もちゃんと読んでいること。それに対して当局が返そうとする資料もきちんと読み、その上で参加することが条件になるのではないかと。一定のセレクションは必要ですね。それが市民会議だったとしても全員がワイワイしゃべるというのはいない。だからワークショップにするとか、6人グループずつ10テーブルつくるとか。ファシリテーターは絶対に必要。職員の中に人材が育ってれば職員を。職員の中にいなければ、文化のまちづくり市民会議を行うより先にファシリテーターやアートコーディネーターを務めることのできる市民層を育成することが先ではないかと。すると、作業部会の中のまちづくりに携わっている市民をどのようにピックアップするかと言ったときに、一定の市民性が働いてしまう危険性がある。よってフィルタリングするという意味で一定程度セレクションして作業する。資料3のサポーターに対して研修を年2回開催しスタッフのスキルアップを図るとあるが、接遇研修会やまちづくり研修会を加えたらどうかと思ふ。アートマネジメント研修、及び酒田市の文化行政に関する条例秩序、計画が狙っているところは何かを学習する項目を必修科目にするべきだと思ふ。その上でアートマネジメントを学び、更に芸術と人権ということを必ず学習する。そうすると3回か4回は必修研修受けてもらわないとコーディネーターは無理かなと思ふ。徹底的にトレーニングをしないとだめかなと。ここで育ってきた人を投入して、最初の文化のまちづくり市

民 会議を開催するならば段階論としてはなんとかなる気がする。人材が育っていないうちに実施するのは怖い。

9月の審議会から状況に変化があった。障がい者のための芸術文化の促進法ができるが、基本計画はまだ成立していない。基本計画の原案ができ、現在パブリックコメントを実施する前段階にきている。障がい者の芸術文化促進法の精神を踏まえれば、方向性はよりしっかりと明確化されている。間違いなかったなどということ。そういう意味では自信を持って良い。コーディネーターやファシリテーターは大事な人材であると共に、安易なスタンスでは務まらない。そういう人材を育てませんか？と言うこと。資料3の書きぶりをもう少し加工すればアクセントは出てくると思う。

それでは第2弾。いただいた意見を元に少し加工修正する。文言についての加工修正もあった。それでは来年度事業について事務局から説明を。

事務局

それでは平成31年度の事業案を説明する。現段階では予算がまだ成立していないのであくまでも案として。条例と計画に基づき、資料4のような事業を実施する予定。市原さんによるマスターコースは継続事業として実施する。昨年度は公開事業としてコンサートのみだったが、来年度は参加されるプロの音楽家2人による小学校、中学校でのアウトリーチも加え、少し拡大して実施する予定。高校生の参加も現在検討中。2ページ目、若竹ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」酒田公演を12月に実施予定。酒田市出身で元東京学芸大の工藤傑史先生が代表を務めるミュージカル団体で、東京学芸大学特別支援学校の卒業生とその保護者の方々約80名と聞いている。そこにオーケストラの方が40名くらい。総勢120名の方々が酒田でミュージカルを行う。酒田特別支援学校の高等部の皆様方も出演予定。また同時期に、障がい者のアート展も同時開催予定。この二つのチラシとポスター等の制作は芸工大の学生と一緒に考えて制作に携わっていく予定。新しい事業としては、東京藝術大学の学生で結成される4人グループ、ヒビカルによる子ども向けのコンサート、学校へのアウトリーチ、楽器クリニック等の実施を予定。山形交響楽団による楽器クリニックに関しては今年度も小、中、高等学校で実施し来年度も継続の予定。その他の新規事業は、3ページ目のアートスタート事業で0歳から参加できるものとして実施。今回2月に開催したアートマルシェは、色々な形でアートに触れてもらおうと試験的に実施した事業であったが、来年度はワークショップも企画。酒田市出身の佐藤時啓先生、佐藤真生先生によるワークショップを10回程度行いたいと考えている。4ページ目。先ほども説明したが、希望ホールサポート事業を新たに実施。土門拳文化賞についてだが、残念ながらこれまで酒田市から文化賞受賞者が出ていない。今度は高校生対象に、選考委員の先生方から組写真を学べる機会を設けようかと考えている。5ページ目。土門拳文化賞25周年記念事業では、文化賞受賞者の作品を東京、大阪、酒田の三か所の会場で展示。主催は文化賞受賞者で結成されている友の会の皆様を中心。主な事業といたしましては以上。これらの事業で期待できる効果が、資料5の文化芸術推進計画の基本的施策の20項目として載っている。◎がついているものは特に効果が期待できるもの。参考資料の平成31年度実施予定事業「ファクトと評価」は、中川先生が作成されたシートを使わせていただき、企画をつくるプロセスを示したものである。

中川会長

180度転換しているというわけではないが、かなり社会包摂が入っていると思う。何か意見あれば。

委員

私は高校生まで酒田で過ごした。離れて随分経つが、私が高校生の時に持っていたイメージは、目立つことに比較的否定的なイメージ。その後酒田はどうなったか。こういったプロジェクトをやった時に誰が手を上げるのだろうか。私の酒田のイメージにはない。今の若い人たちは昔と変わっているのか。

委員

多少は変わってきたと思う。

委員

私は、自らこの企画に参加したいという人は本当にいるのかととても危惧している。この計画はとても良いと思うが、酒田で暮らしている人たちはどう思うのだろうか。

事務局

最初は少なくともどんどん増えていくように進めていきたい考えている。

委員

委員が言っていたように、相当強烈に何度も何度も繰り返して伝えていく必要があるのかなと思う。

委員

事業を組み立てて広報でお知らせするわけだが、学生をサポートする場合、あるいは参加してもらう場合、学校教育の協力を得る必要があると思う。これは行ってもいいんだよという許可を含めて、音楽なら音楽の先生、美術なら美術の先生のアドバイスや薦めが必要だと思う。先生が前向きにやらない限りは生徒たちは動けないと思う。

中川会長

そういう意味で作業部会に学校の先生方の代表が入っていないといけない。

委員

先生は忙しく、中々力を貸してくれないと思う。仕事の邪魔にならないように参加してもらうのはなかなか難しい。

中川会長

委員のおっしゃる通りである。もし元気があるんだったら協力してね、どこでもそのスタンス。それでいい。ちゃんと意見も言ってくれる。非協力的だからといってメンバーから外してはいけない。

委員

今の話の通りいかに参画していただくか。美術館でも色んなワークショップやコンサートを行っているが、常に問題なのが参加者を確保すること。学校でもすぐにOKがとれない。これをきっかけに多くの学生、生徒、子どもたちが気軽に来られるような環境を作ることが必要。どの施設も共通する問題なので、認識を一つにして問題を解決できるようなプランを一緒に考えていく時間をいただければと思う。

委員

一昨年酒田市と経済界が一緒になってつくった組織、産業会館の一階にある“36”、みんなサンロクと言う、正式名称は“酒田市産業振興まちづくりセンター”。その立ち上げのときに何が大事なのか話し合った結果、先頭をきって引っ張っていくメンバーでこの組織の成績が決まるとなり、数名のコーディネーター力がある人を数名選び、その人達が見事に機能した。今そこには色々な人が集まり、想定以上に上手くいっているように見える。さっき中川会長がおっしゃるように、ひとつひとつの事業を考えることは大事だが、酒田市文化芸術の36をつくるというイメージじゃないと、事業を考えても逆に事業の評価だけで終わるのかなと。突破力のある複数名の人がこの新しい芸術活動の中心的な役割になっていないと厳しいと思う。それをどのようにして選べば良いのか皆さんの話を聞いて考えていた。専任で汗水垂らしてやっているメンバーがいなくて厳しいかなと思う。学校の先生については熊倉委員と同感。学校の先生は非常に忙しく何とかしてあげないといけないと思う。教員の皆様方に何か新しいことを持っていくのは非常につらいと個人的には思っている。

中川会長

教員に関しては、文部科学省の指針もでて少し改善される見込みが出てきたようである。まだまだだが。

委員

先ほど委員が、少し尖った事業をと発言したように思うが、それが来年度の事業の中ではどんな所なのかと考えている。市原さんの企画や土門拳文化賞を25年間開催してきたことはすごく貴重なことだと思う。酒田に帰ってきて今年で3年目だが、何が不足しているのか考えると、たとえば土門拳文化賞の選考過程が市民には見えていない。そこで、選考委員が5作品ほど選び、選ばれた作品について作者自らがプレゼンテーションを酒田で市民を交えて行い、その後委員による最終選考など、選考過程の見える化を図る。そうするとそこにお祭り性が出て来る。セレクトされる過程を見せてあげることが非常に大切だと思う。作者自らが作品に込められたメッセージを伝えることで、市民の琴線に触れ、作品の理解度が深まる。せっかく25年も続いている事業があるのに、ブラッシュアップすることを考えないと、マンネリ化し事業の継続すら危うくなる。昨年の市原さんの市民を交えてのマスターコースレッスンも、祝祭性があったと思う。お祭り性があると容易に参加でき、尖がっている人たちの多様な意見や表現に接する良い機会になる。予算がしんどいなら隔年でも良いと思う。選考委員の先生たちに任せるのではなく、市民も参加し、いろんな考えの表現者がいるということを知り得る場、多様な意識を芽生えさせてくれる場が重要ではないか。

委員

委員の話聞いて、“尖った”ということにピンときた。昨年の市原先生のマスターコースもそういういみでは尖った企画だったのかもしれない。今年は尖りが平坦になったかなと、広がりやすくてたかなと思う。でも尖ったものも必要なので、そういった要素も残しながら企画して行ってほしい。メンバーの募集をかける時に、広報は私たちは見ていると思うが、三世代家族だと案外若い人たちは見えていないことがある。配布したからと言ってみんなに伝わっているとは思わない方がいいと思う。いろんな媒体を使って発信していく。一つの事業が一つの事業として完結するのではなくて、なるべく複合化していくことが大事だと思う。

委員

みんな情熱を持って取り掛からないとダメだと思う。研修の重要性もお聞きしたし、多数決ではいい文化が育っていかない。感動を与えるような事業をやればみにくるだろう。そういう方向でやってもらいたい。

委員

土門拳文化賞も今のままでは市民の皆様も他人事である。良いアイデアであり、もし成功したら候補者が酒田に滞在して酒田を撮る。そしてその中から選ぶ。委員のおっしゃる通り、サンロックが必要。それがなければ何も動かない。少子化でもし教室が余っているなら、そこに3年契約で、部活動でサッカーや野球を含めて、面倒を見てくれる若手アーティストを入れて心の保健室のようにする。その代わりに学校への文化事業を受け入れてもらう。日常的に子どもたちを見てピックアップして送り込んでくれるような体制がないと。学校の先生はそういう視点で子どもを見ていないので、今のままだと難しい気がする。

中川会長

今いただいた意見は煮詰まった刺激的な意見である。土門拳文化賞はもっとイベント性をもった方がいいんじゃないのと。その通りだと思う。委員から指摘があって、委員からもあったセミプロフェッショナルというか、専門性を持った市民人材を蓄えていく事が大事だと思う。アーティストや行政がどうのこうのではなくて、そういう中間人材を蓄えなければいけないという答えがでたと思う。病院でも医師の事をメディカルと言うが、パラメディカルがすごく大事。看護師、レントゲン技師、薬剤師がしっかりしていると、医療全体の水準が上がる。そういう意味でパラアーティストだと思っている行政のレベルアップは。そういう点で財団はものすごい大きな役割を果たしているはず。財団自身ももっとパラアーティストを内部化していったって増やしていくことを戦略にしていきたい。施設を預かる財団ではなく、人を育てる財団であってほしい。希望ホールのサポーター事業に関しては、名前を変えてもいいと思う。酒田市アートサポーター養成事業でいいと思う。希望ホ

ールだけに限定する必要はない。エリアを広げて、徹底的にトレーニングしたらどうか。それでは本日の協議を終了する。

市村補佐

今後の予定について。次年度第1回目は4月の予定。改めてご連絡する。

教育長

改めましてお礼を申し上げます。今日の審議会では、最も心配していた点を議題にさせていただいて有難かったと思う。特に企画運営部と作業部会の在り方については、実は具体的なものがない非常に抽象的な原案であった。ただ今日、質問を集中的に浴びたおかげで考える材料が出てきたのかなど。もう一つは人材をめぐる話題が半分以上出ている。人と人がどうつながっているかが最も大切。特に広報みたいなもので人を動かそうとしている。発想がこれしかないのでは我々は。そうではないはずだという所からスタートして、1人1人とパイプで繋がっている物を作っていくといかない。サンロクの話もそうだった。コーディネーターやファシリテーターは、サポーターをどうやって人材育成していくか。私自身今日は塾に参加しているつもりで来ている。審議会だが毎回講座に参加している気持ち。こういった講座のような機能を持っているものを酒田市につくり、興味のある人が座学だけでなくワークショップで何かをやって形をつくる。講義と作業が一緒になったスタイルを酒田市でつくっていく。いずれはコーディネーターやファシリテーターになっていく。そういった一本釣りもあるだろうが、一方で幅広くやっていく作戦は非常に刺激的で面白いなと思った。それからもう一つ、委員がおっしゃったように、プロセスに参加させるドラマ性、そういったもの自体がとても大切なことなんだ。それが参加することなんだというご意見をたくさんいただいた。学生や、学校の先生の話も多岐にわたった。この会議録を多くの人に読んでほしい。本当にありがとうございました。

【以上】